

波板状凹凸面牛馬歩行痕説再論

東 和 幸

A Supplementary Examination about the Hypothesis
that the Uneven Waving Ground is a Trace of Oxen and Horses' Passing

Higashi Kazuyuki

要旨

道路状遺構に伴う波板状凹凸面について、凹面間の芯々距離が歩幅の間隔であることや現在の牧場でも同様な連続する窪みがみられることから、人間を介しての牛や馬が永年歩いた痕跡であると主張してきた。今回は、九州以外の波板状凹凸面も含めて中世の絵画資料や海外の映像などを紹介し、その説を補強することを目的とする。

キーワード：波板状凹凸面，牛馬歩行痕説，民俗（族）事例

1 はじめに

波板状凹凸面は、道路跡に伴う遺構であることは認識されているものの、自然発生説及び人工説にしてもまだ決着をみていない遺構である。筆者はこの波板状凹凸面が人間を介してはいるものの永年牛や馬が歩いた痕跡であり、自然発生でも人工的でもない無意識の内に出来上がった遺構と考え、発表してきた¹⁾。筆者の見解に対する意見を私信あるいは口頭で数名の方々から伺ってはいるものの、未だ研究発表や論文などでの批評はみられない。今回は以前の説を補強することを目的とし、追加資料を提示するものである。

2 これまでの見解

(1) 波板状凹凸面についての問題点

波板状凹凸面は道路状遺構に関係の深い遺構であり、等間隔に連続した窪みが見られるもので、1970年代以降の発掘調査で北は岩手県から南は鹿児島県まで分布し、その時期も古墳時代から近世前半までの長い期間を通して存在する遺構であることが明らかになってきた。北郷泰道²⁾が1987年の論文で木馬道説を提示して以来、重永卓爾³⁾・飯田充晴⁴⁾・早川泉⁵⁾・近江俊秀⁶⁾・山村信榮⁷⁾等によって盛んに研究及び議論がなされ、「自然によるポットホール説」・「枕木・コロ説」・「路床基礎工事説」・「足掛け説」・「排水施設説」が提示されているが、未だ波板状凹凸面が何に起因するものか決着をみていない。

(2) 研究の方法

筆者は波板状凹凸面の最大の特徴が歩幅ぐらいの距離でほぼ等間隔に並ぶことに注目し、九州の4県12遺跡32例（鹿児島県山崎B遺跡・木場A遺跡・宮崎県前畑遺跡・水落遺跡・松原遺跡・熊野原遺跡・大岩田村ノ前遺跡・並木添遺跡・熊本県塚原遺跡・うてな遺跡・福岡県薬師堂東遺跡・

高津尾遺跡）の波板状凹凸面について芯々距離を計測した結果、芯々距離の平均値でほとんどが60cm～70cmに収まることが解った。この数値が馬や牛の歩幅ではないかと仮定し、日本の古代・中世遺跡で出土した牛馬骨の計測値を調べると、牛は体高115～120cm、体重200～280kg、馬は体高130cm前後、体重300kg前後が推定され、体高との比較から70cmに近い歩幅が求められることが解った。

次に、波板状凹凸面が牛や馬が永年歩いた痕跡ではないかという仮説を検証するために、現在の牛や馬を観察した。鹿児島県川辺町森林馬事公苑・同町青木牧場・薩摩郡入来町鹿児島大学農学部付属入来牧場・御崎馬の放牧地である宮崎県都井岬を訪ね、さらに現在も馬が頻繁に同じ場所を歩いて砂糖黍搾りを行っている龍郷町秋名の砂糖車を調査した。その結果、青木牧場と入来牧場で牛が永年歩いた場所に連続した等間隔の窪みを確認することが出来た。また、名瀬市立奄美博物館で馬による砂糖黍搾りの様子が描かれた絵では、馬が歩いている場所が溝状になり等間隔の窪みが表現されていることが解った。

(3) 得られた結論

凹面間の芯々距離・現在の牧場に見られる凹凸面・牛や馬の足裏にかかる圧力等から、波板状凹凸面は整然と統制された牛や馬が永年同じ場所を歩いたことによって出来上がった遺構ではないかと考える。また、路面に残る硬化面もその可能性が高い。

3 追加資料

(1) 波板状凹凸面の間隔

前述したように、凹凸面の芯々距離はほぼ等間隔であり、九州4県の12遺跡32例を計測した結果、平均で60cm～70cmに収まった。今回は、前回紹介しなかった九州の3例に加え、九州以外の6例を同様に計測した。その結果は、